

# 薬草園の花だより

第3号

2017年(平成29年)7月21日発行

## ■第3号に寄せて

季節が巡り、花が移ろうのは早いものです。この『薬草園の花だより』はほぼ1ヶ月に1回の発行と考えていたのですが、この時期の花の紹介は見逃せないと考えたので、第2号が刊行されてからまもなくの第3号発行となりました。冬になると1ヶ月に1回も難しくなってしまうから、今のうちに薬草園の花の開花を多く紹介しておきましょう。

このパンフレットは、プリントアウトしたものを漢方資料館前のテーブルにも若干置いてありますので、是非、お持ち帰りになって御覧ください。(船山)

## ■今咲いています

### 《オトギリソウ》

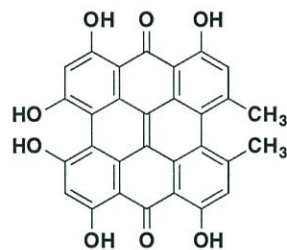
オトギリソウ(オトギリソウ科)の花が盛んに咲いています。場所は温室の北側の花壇とその外側。どういうわけか、薬用植物の中には植えたところには落ち着かず、周りに種が飛んだりしたところの方がよく育つことがあります。オトギリソウもそんな性質を持っており、オトギリソウの立て札のある花壇内よりもその外の方にエスケープしたものがよく育っているようです。オトギリソウの葉を陽にかざすと、茶色い点々が見えます。これを油点といい、葉ごと潰すと赤茶色になります。この色素成分の正体はヒペリシンです。

オトギリソウは弟切草と書き、鷹匠の兄が秘密にしていた鷹の傷薬を、その弟が他人に漏らし、怒った兄に弟が斬り殺されたという平安時代の伝説からその名前がつけられたと言います。すなわち、この葉をもんで出現する色はその弟の血なのだとか。

オトギリソウを食べた家畜が日光にあたり、強い皮膚炎を起こして脱毛することがありますが、これはヒペリシンが光化学反応を起こしたためと考えられます。同じような作用をもつものにドクダミに含まれるフェオフォルバイドaもありますので、ドクダミ茶を飲んで皮膚が荒れたりしたら、一度、ドクダミ茶の服用を止めてみるべきでしょう。



オトギリソウ



ヒペリシン

### 《ハス》

今、薬用植物園に咲いている植物ではありませんが、先日、朝早く、原市沼のハスを見に行ってきました。ここのハスは特別に大型の花をつけるらしいですが、実に美しいものです。早朝にもかかわらず、結構多くの方が訪れていました。ニューシャトルの沼南駅から歩いて5分程度。車でなくても、駐車できるスペースがあります。原市沼のハス田の公開は8月15日までとのことですが、7月中の今がまさに見頃です。ハスは泥の中から芽を出してこんなに美しい花をつけるということで、愛でられています。本当に素晴らしい植物だと思います。

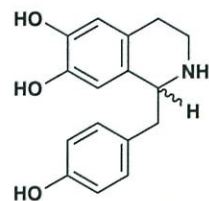
ハス(ハス科/旧スイレン科)の語源は蜂巢(はちす)と言われます。花の終わった後に蜂の巣のような形の花托の穴に種子が入ります。種子を割るとその中に緑色の小さな葉の形をした部分(胚芽)があり、口に入れると苦いのですが、この部分を集めたものを「蓮子芯(レンジシン)」という生薬として使わ



ハス



れます。台湾などでハスの実を料理に使うときにはこの部分を除きます。その成分として、強心作用のある(±)-ノルコクラウリンなどが知られています。



(±)-ノルコクラウリン

## ■他にも咲いています・咲き始めました・見どころです

### 《ヤマモモ》

ヤマモモ(ヤマモモ科)は常緑高木で、わが国では暖かい地方に自生します。本学の薬用植物園には温室前の花壇に植えられており、まだ、小さい木ですが、今、美しい果実を3個つけています。可愛らしいですよ。是非見てください。

ヤマモモはその樹皮をヨウバイヒ(楊梅皮)と称し、収れん・止瀉などの目的で使用されます。化学成分としてはフラボノイドのミリセチンやその配糖体のミリシトリンなどが知られています(発行日の今日みたら3個とも無くなっていました/靴を履いたカラスかな?)。

### 《ヒマワリ》

小型のミニヒマワリが咲き終わって寂しく思っていたのですが、ついに大型のヒマワリ(キク科)が満開の時を迎えました。薬用植物園の池のあるところの奥の方にたくさん咲いています。是非、ヒマワリを見て、夏を感じてください。

### 《ガガイモ》

ガガイモ(キョウチクトウ科)が今、花をつけています。そばでよくみるとなかなかきれいです。薬用植物園の外になりますが、学内のところどころに自生しています。ガガイモは以前にはガガイモ科に分類されており、ガガイモ科を代表する植物と思っておりましたが、現在はキョウチクトウ科に分類されています。(旧)ガガイモ科にはかつてイケマ(生馬)も属していましたが、イケマも現在はキョウチクトウ科の植物です。

### 《ニチニチソウ・マリーゴールド》

どちらも夏の花壇で元気に咲いている花の代表です。ニチニチソウ(日々草)はキョウチクトウ科の植物で、歴とした薬用植物でもあります。すなわち、この植物から、有名なピンクリスチンやピンプラスチンが得られます。ニチニチソウは以前にはピンカ属に分類されていたため、別名をピンカといい、ピンクリスチンなどのアルカロイドの名前もつきましたが、現在、この植物はカタランサス属に分類されています。なお、寒さに強い蔓性の宿根草で、うす紫色の花をつけるツルニチニチソウの方はピンカ属に分類されています。

一方、マリーゴールド(キク科)の根からは $\alpha$ -テルチエニルという含硫化合物が分泌され、この化合物は大根に害を与えるネコブ線虫(ネマトーダ)が嫌います。そのため、大根の畑にマリーゴールドを混植すると、大根の発育に良いことがわかりました。このような植物同士の関係はコンパニオンプランツと呼ばれ、無農薬栽培の大きな味方となっています。今度マリーゴールドを見る時にはこの話を思い出してください。



ヤマモモ



ヒマワリ



ガガイモ

## ■薬用植物園からのお知らせ

### 《オープンキャンパスにおける薬用植物園の案内》

2017年7月23日(日)に開催されるオープンキャンパスにおいて、薬用植物園の案内を実施することになりました。今回は船山が担当します。時間は1回目が12:30から、2回目が13:30からです。興味のある学生がいたら一緒にこの見学会に参加してみたいはいかがでしょうか。

発行：日本薬科大学薬用植物園運営委員会  
委員長/船山信次  
副委員長/山路誠一  
委員(教員)/野口博司、西川由浩  
新井一郎・糸数七重  
委員(事務)/今村隆・笹井彰・鈴鹿和子  
土屋翔太郎・天野崇教・高峰康行